立花便覧 上

166
1.50

1026
1.50

立花便覧序

四時のうつるけしきのよく目にみゆることは植物よりいちじるきはなし彼なすつ木にけりと見ゆる卯の花は松のみどりも春これぞとも和哥のよめる待遠いそで唐詩のはじまる文志のなかにき柳雪尾の梅より西は中柳菊来立のいよやこのなる菫くの秋乃いろ木の葉に非声月まで人と高低とらる天も人もひとりなれなかめなとしあくめてくすき風景とぞわが立花よ

いふ〳〵てもてあそふめ流行れハ抛
あま道ハ別ありとこのや此術の規模をも
志らぬ人ハ志らぬにして傳るを志る
人乃学ひ也かやとおくもあつめ学する書紙
仍只何党なく立花便覧と名つけ予の
なし

元禄八年正月之吉

松領山題ス

[印：領山]

右三十ヶ條ひそかに見へたり

追善の花乃事

三ツ具足の花の事

筒束花乃事

祈祷神前の花のこと

松竹梅の花乃事

水際の沙汰乃事

祝儀に用へき花のこと

祝儀に嫌ふへき花の事

法躰餝乃花の事

立花餝目録

真乃花の事

行の花のこと

草の花乃事

對乃花の事

専ら嫌ふへき物

抜通の事

瓶磨乃事

越きりのこと

枝きりのこと

本きりのこと

葉うらの事
合前垂事
枝うらの事
長（たけ）さへの事
腰折の事
後より前へ廻枝の事
瓶の口より下る枝の事
四ツ手の事
此十三ケ條専ら隠すべき事
類の花瓶の割の事
祝言花の事
十二月て用物の事
五節供て用物の事
ちぶりなる花の支
草木の善と不善花の事
元服袴着（はかまぎ）の花の事
花一瓶の内の事
大葉の事
花瓶の事
祝儀の心入の事

三瓶乃花作法の事
蓮の一色乃事
四季の指様のこと
通用物乃事
不祭の事
皆用物乃叓
一色物のこと
三ヶの前置乃叓
砂鉢花養の事
已上目録終

ヌキ通シ

葉スリ

越切

抜切

本切
葉越

合前垂
枝越
長クラヘ

コレヲレ

後ヨリ前ニ出ル枝

瓶之口ヨリ下ヘ枝

心
副
見越
請
流
四ツ

心
請
正心
副
流
竹之副ハ込入くのよくにそくなり
扣枝
草トメ
洞化
同
洞化

心
うけ
日

水仙葉こしらへ
けと板
鉢

二ツ心指
合心指
正心指

相生ノ松
は込よし
は込まき
は込わら

○心の華之事

一枝葉のひまハ前後左右長短と心得べきなり葉組の枝として南季の花も直居と積て用へし長短の枝葉ハて四方ともへ分様をなく又四方ともしかるやうにもあくして枝葉その多くりて園むのこころとて枝葉さのミとりかへさるして心ハ下草とつけあるてほまくよろてしまひさはまてもこ海やうにもとこあてたてへきなり

○行の華之事

一行の花とハ心の花をすこしかげしたる枝ありまた直心とかの也副をうけまて則行の花なり心かさねても用しるす又さいかうに深き心ありても副流もありて請の下へ流も挿すべし道具をうけば行のなりとて

〇草の華の事

一 草乃花といふハ行の花を崩しし所をいふなり或ハ心のなり
によりて流とりし色副りて粗とりし色流めし除とも
し色草の本也そしてはんそて花行といふ事なり

〇對の花の事

一 直心なしと除心ありても同しやうなる所り木と木とも又其外と
草とものうちひとつ草と木とも又松竹なとも用へし
一 枝通（めさとをし）といふハ流と粗と同し出口なる所いふ也しかるに
にあんへなり
一 縁磨（へんすり）といふハ細にして色枝葉の花瓶の口へつけるやうにといふ之
一 縁切といふハ胴（どう）のなかにとりいれたる縁より下へりもう
一 枝切といふハ細にして枝を切
すとのなりもかなることにあんへなり
一 本切といふハそを越切のやうにたちのし切すといふそひかりてるり
一 葉越といふハ枇杷（びわ） 紫苑（しおん） 柏葉（うしはのそ） なとの大葉の下より本
までも草にても捨すとそのなり
一 合葉越といふハ草方に二色あるへて事しとのこと葉越
そうなる次なりくしに捨へし
一 枝越といふハ枝のなかどこり捨ことるなかに柏を捨るへし
一 長比といふハ細にして色末の同しやうになりひとるといふなり
ひなくうりうへなり
一 深折といふハ枝葉のかきさうりてはかうなる枝なきと云
なりしかるにへなり

一後より前へ廻枝といふ也心の後より胴まで廻枝葉といふ也

一胴の口より下除枝といふ何にても本末のさがりて除といふ也
む流れなどの本末のきをひさがりしかへてたわり
ろきさるのなれどもわろし

一四ッ手とは副請流れ留し下より出るといふ事なりかな
ら次四ッ手なるべし　此十三ヶ条あるべきなり

○心の華の割の事

一心は一の枝より六七分下正心とさげ正心の葉添下より
副の下前おり副と流の中おとより請の後口なり

○松の挿事

一心松あしへはたたくまし此松を挿べし二挿の時女挿なるべし

より留へしたり心の下さ前まえて用ゆべし流なる方
を草あてて用ゆべし心の方を男挿流の方を女挿といふべし

○砂物挿之事

一砂物は大小にかかわらず二挿の時は三わりに中おひろく一挿の時は
三わりひと分心のさの方より心と申べし丸さ弥すにし
中へよせて挿べし

○砂物挿割之事

一苔（こけされ）瀑或は松の葉さ切まて立るよし心の方はさかみて真なる
より女挿は方より入ゆがみ事よりし女方本は直なる末は
ひさ切へかつきの男だしら流る事にてより挿
とてれより入色あり面よは體をつけ後ありうらの

心の華ハ同し心より合抱なり習の口傳なり

○相生(あいとひ)松之事

一本ハ一本より一本ハ際(ぎハ)より出て手上より両へ出る松なり
両の枝あるさわし返す法あり習有へし

○花瓶返挿様之事

一返しあそうたる○ハわろし生ひとつ二ばくゆひあるを
ほしとくたかよりかりしこそつくはくふるへるとよし

○立花挿道具之事

一鋸(のこぎり) 小刀 きり かなばち 打つき こみさし ゑひさし
はさみのたぐひをとたしなむへしいけさるたよしとするなり

○追善の華之事

○三具足の花之事

一三具足ハ地の心ハ高さハ花瓶をうけ中心高をほとをとも
わきくわんをそろたるハ二葉をつけめてもおるへきなかの三ほり
流香炉のかりそ升て細へくし流とけるへしと心より
請とて兵ハ枝とかるへしなかにて色草ま八枝葉の
両像よわたりおもやかしゆきゐ色し

○筒束(どうつか)華之事

一心ハ高さやと横へ出してひさく立あり柳の類を出し
枝より分ハ枝葉を出るまでの縛るへきなし

○祈禱(きたう)神前の華之事

一心ハ枝葉のはらへさる直心と本をさだむへし脇はつづき

て結とよふへし九枝とも同し

○松竹梅の花の事

一松竹梅ハ三枝と用る事ハ祝儀にたつへし一瓶の内ならく
必ず押板三瓶の心に松竹梅用申事也

○水際の心得の事

一水際ハ心得と云ハ草との下一すそかり葉を見せへ
もちりや縁くん共にして水際とやハ夜秋の下まて一すて
かりあるへし又ハ春生て草立のかるまや秋ハ菊竜胆
よりも春ハきさつ花の際まて夏ハ水際ひきくて風あり又ハ
是程も草木枯なて春ハ種より枯おかる木根と立
得る也南天の花よ限りて野山水邊自然の姿を学ふまて

鶏冠花　銀沙柳　桔梗　菊　仙翁花　金銭花
岸比　山橘　長春　水仙花　仙蓼　百合
杜若　常盤木　著莪　小歯朶　藜蘆
九つ以下の数用ゆへし

○祝儀に嫌ふへき花の事

河骨　馬酔木　紫竹　山卯木　紫苑　梶
沈丁花　竜胆　切芽落　芭蕉　曼珠沙花　鳳尾草
口梨　一ツ葉　深山樒　鴈足　覆盆　烏萩
赤前花　芥子　木瓜花　むくげ　茶花　ところ葉
いそもち　蓮　躑躅　鬼薊　鬼百合　萱草　蒲ノ穂
芦　ふるとり花　つゆ草　葛の花　帰子花　杜鵑花

○五節供に用物之事

▲元三 梅 水仙 金盞花 ▲上巳 桃 柳 酴醾

▲端午 竹 菖蒲 石竹 ▲七夕 桔梗 仙翁花 梶木

▲重陽 菊 萩 鶏頭花

○たて物華之事

一 たてる花の心は床の際に指花なり 心下に添を
添として立る事太りに横へ出すやうに縟ハ花を葉より
生しる所をものなれはなり

○草木に花不花之事

一 花不花とハ床の際に立べし 草木は心につかふことに
いかにも草より花とハ木とハ木ハ木末茎ハいかにも

一 心は松柳梅とをもと用ゆべし 前立ハ桂金盞花を用
ゆるし 枯葉嫌ふべし

○花一瓶の内之事

一 一瓶の内にそも先まへと身つと用ゆべし 物あて色専ん
ゆへさることも身二つも色し今つかふ花に総じ身三と添身より公
滑て用ゆべし 中央花ハ何方も面なるべし 書院の花
も前後と面とに向色立なり

○大葉之事

一 陰陽は葉ふとて面後ろの葉あるハ又裏を見るる為を用
ゆへし 実りよりあけの色し 茂り流れあふて留るの事なり

○華瓶之事

一口ひろきさし花瓶ハ上あくひろきせ中口の花瓶のやう中程よりまてひろき段細口よりハ際迄てひろきすがた也

○花瓶の心へ花の事

一上座の花一瓶花瓶乃んを右に八本尾の花ハいつも下にをくるべしかくて押板の上三瓶の内も先ハ中當花を本とす

○三瓶の花の出生の事

一三瓶の花乃出生とるハ中ハ真よ花合をして心乃花ある也

○蓮の一色の事

一水草にあ山花殊指きせてひと同よ花とあるめ水際よ花のとくとかせとまよかへぎりてうへ木の数うつ花合たりし次第の通り葉を挿べし

まさ秋の末より冬春乃はじめまでハ梅をおもに挿べし

○通用物の事

一竹　酴醿(やまぶき)　まんさく　唐ざくろ　薇　歯朶(しだ)
鴨足　我毛香(われもかう)　しもつけ　仙蓼(せんれう)　南天　石南花(しやくなんげ)
藜蘆(おりしと)　牡丹　紫陽花(あぢさい)　ひとつ葉　刈萱(かるかや)　竜胆(りんどう)
てまり　すゞかけ　かぎりなく数あるべし

○紅葉の事

一先高尾山のもみぢハ盛り心副清流の築まで挿べし下外ハ松檜けいさきとを花合色し赤色なる下草指まじへと前者に赤さ下草ともに周物の一種まじへつけ○の三花よ紅葉花をまじへ後の道の葉より

硯瓶の用意深く此手跡或は真草行をつくさ
ずまでも一様なりとぞ然るをわがはかゝる様も大
方にもやつらひかく侍るへ或なり野山よりきる
草木の葉を海なまでも仮名と婦ひものも
書たりとかくされどもいつまでの見のも如何なれ
ば得たる習ひをつくさなり